

領事の手紙を読む

——『火山の下』の一考察（I）

Reading the Consul's Letter:
A Study of *Under The Volcano* (I)

野 呂 正

要 旨

マルカム・ラウリーの『火山の下』の主人公、メキシコの観光・保養都市、クアウナワクの英国領事ジェフリー・ファーミンは1938年11月2日、「死者の日」にある酒場で横死を遂げる。彼は重度のアルコール中毒症で、その禁断症状を抑えるためにそこに入ったのだが、そこに屯する極右グループに目を付けられ、スパイとして射殺され、死体は深い谷底に投げ捨てられてしまった。

物語自体は翌年の「死者の日」に始まる。領事の友人、ジャック・ラリュエルがクアウナワクの町を歩き回りながら領事のことを様々思い出す。その遺遭の果てに、彼は領事が生前、別れた妻宛てに書いた手紙に出くわす。それはドラマの主人公、領事の内的独白と見ることも出来る。彼がアルコール中毒によって、肉体的にも精神的にも、地獄の苦しみを味わっていたこと、そのなかでも天上を希求していたこと、また彼に愛想をつかして、彼のもとを去って行った妻イヴォンヌに対する彼の愛憎を見ることが出来る。手紙は十節から成るが、本稿においては前半の一～五節を扱う。

キーワード

アルコール中毒、離婚、地獄、天国、メキシコ

マルカム・ラウリーの『火山の下』はメキシコ中南部の観光・保養都市クアウナワクの英国領事ジェフリー・ファーミンのこの世における最期の一日を扱ったものである。

1938年11月2日、「死者の日 (the Day of the Dead)」に彼はある酒場で横死を遂げる。彼は重度のアルコール中毒症で、その禁断症状の苦しみを抑えるために、アルコールを求めてその酒場に逃げ込んだのだが、そこに屯する極右的なグループに目を付けられ、外国人であるが故に、スパイの嫌疑をかけられて射殺され、死体は深い谷底に投げ捨てられてしまったのである。

物語は領事の死から一年後、1939年11月1日、「死者の日」に（メキシコにおいてはこの日も「死者の日」に含まれる）、領事の友人、フランス人映画監督ジャック・ラリュエルが故人を思い出すところから始まる。彼はクアウナワクの町を歩き回りながら、領事のことをあれこれ思い出す。その逍遙の果てに、彼は町で唯一の映画館に隣接した小さな酒場に行きつく。そこで映画館の支配人プスタメンテに声をかけられる。二人はしばし雑談を交わすが、プスタメンテは突然何かを思い出したらしく、中座して映画館の方に入って行き、一冊の本を手にして戻ってくる。表紙が手垢で汚れたエリザベス朝戯曲集である。それは一年半ほど前、自分の映画作りの参考にしようと彼が領事から借りたものだが、その後すぐになくしてしまったものである。映画館に置き忘れていたに違いない。彼はプスタメンテに礼を言って、その本を受け取る。

やがてプスタメンテは映画館の仕事に戻って行くが、一人残されたラリュエルはエリザベス朝戯曲集をパラパラとめくって、拾い読みをする。すると本の中から紙がはらりと床に落ちる。拾い上げてみると、それは領事がよく吞んでいたホテル、オテル・ペーヤ・ビスタの便箋にびっしりと書き込まれた手紙だ。それは領事が去って行った妻イヴォンヌに宛てて書いたものだが、実際には投函することもなく、そのまま本の間に挟んでおいたらしい。ラリュエルは領事の心の秘密を覗き込むようで、少し後ろめたさを感じたが、それを読んでゆく。我々読者もラリュエルとともにこの手

紙を読んでゆくことになるのである。

〈第一節〉

領事のアルコール中毒に愛想を尽かして妻イヴォンヌが去って行ったあと、独り取り残された彼の心境が綴られている。アルコール中毒による震顛譫妄（DTs）、幻聴や幻覚の苦しみを訴えている。それは彼の内に悲哀の感情、自責の念、死への願望とそれと裏腹な肉体的な死への恐怖を生み出してゆく。

... Night: and once again, the nightly grapple with death, the room shaking with daemonic orchestras, the snatches of fearful sleep, the voices outside the window, my name being continually repeated with scorn by imaginary parties arriving, the dark's spinets. As if there were not enough real noises in these nights the colour of grey hair.¹⁾

（……夜：そしてまた、死との夜ごとの取っ組み合いだ。部屋は悪魔達のオーケストラで振動する。悪夢にうなされるときれときれの眠り、窓の外に声がする、架空の人々の集まりがいくつかやって来て、自分の名前が絶えず軽蔑をもって繰り返される。闇の中でスピネットが響き渡る。まるでこのごろの白髪色の夜には本物の騒音が足りないともいうかのようなようである。）

領事にとってはそれらの騒音（野良犬の遠吠え、一晚中時をつくる雄鶏の鳴き声、太鼓の音、電信線に白い羽がごちゃごちゃ集まってたてる音、リンゴの木をねぐらにする鶏達がたてる音などであるが）はスペイン人の征服や原住民の様々な内部抗争によって痛めつけられたメキシコの大地があげる永遠の哀しみの声であるかのように思われる。

だが、領事としては自分の哀しみは古い修道院の中に、飲酒の罪は回廊

の中、タペストリーの下に、また想像を絶する酒場の哀れみの中に持って行きたいと思う。その酒場では、

... sad-faced potters and legless beggars drink at dawn, whose cold jonquil beauty one rediscovers in death.²⁾

(……悲しい顔をした陶工や脚を失った乞食が夜明けに酒を呑み、やがて死体となって、その冷たい淡黄色の美しさが再発見されるのだ。)

そのような酒場を求めて、つまり自らの死を求めて、領事は、イヴォンヌが去ったあと、オアハカ (Oaxaca) に行ったのである。

オアハカはクアウナワクから南約500キロにある同名の州の州都であるが、そこまで狭軌の列車での旅は領事にとっては肉体的にかなり辛いものだったが、そこに着いてからの体験は更に辛いものだった。

... when I went to my room in the hotel where we once were happy, the noise of slaughtering below in the kitchen drove me out into the glare of the street, and later, that night, there was a vulture sitting in the washbasin? Horrors portioned to a giant nerve! No, my secrets are of the grave and must be kept. And this is how I sometimes think of myself, as a great explorer who has discovered some extraordinary land from which he can never return to give his knowledge to the world: but the name of this land is hell.³⁾

(……以前僕等が幸せな時を過ごしたホテルの部屋に入ると下の厨房で家畜を殺す物音が聞こえてきて、太陽がキラキラ照りつける通りに飛び出した。その夜、遅くなって、部屋に戻ると、洗面台に(死肉を食うという)ハゲワシがとまっている。図太い神経に分け与えられるべき恐怖だ！ いや、自分の秘密は

墓の中まで持って行って、絶対に守らなければならない。そんなわけで、僕は時々自分のことを驚くべき国を発見しながらも、その国のことを世に伝えるため帰ってくるのが出来ない偉大な探検家だと思ふことがある。でもその国の名は地獄なんだよ。）

領事は一般のメキシコ人からはただの酔っ払いと見られているが、実は文学に極めて造詣の深い人物でもある。節の最後を締めくくる文は *Hamlet*, III. 1. 79-80, 主人公が自殺の結果について思いをめぐらせながら言う台詞 “The undiscover'd country from whose bourn (boundary) / No traveler returns” のエコーである。また「その国の名は地獄なんだよ」はダンテの『神曲』地獄篇 XXVII 64-65を意識していることも明らかである。

〈第二節〉

領事はオアハカからクアウナワクに戻り、二つの知らせを受け取る。

一つは弁護士からのもので、イヴォンヌとの離婚についての知らせである。これは自業自得というもので、彼としては受け入れるほかない。

もう一つはイギリスはメキシコとの外交関係を断絶し、駐メキシコ領事は全員本国に召還されるという知らせである。第二次世界大戦前夜、枢軸国と連合国の対立という世界情勢の中で、1938年3月18日、メキシコ大統領カルデナスは自国が陥っていた深刻な経済不況の打開策として石油産業の国有化を宣言し、石油の販売を枢軸国側に任せたのである。これに対してイギリスとアメリカは様々な報復措置を取るが、その一つが自国民のメキシコからの退去だった。

だが領事としてはこの本国召還命令に従うつもりはないという。イギリス領事達は大部分が親切で善良な人々だが、自分はアルコール中毒ということで彼等の品位を貶めることになると思うからだ。いつかは故郷に戻る

ことになるのだろうか、イングランドにはないと言う。領事はインドのカシミール地方の中心都市スリナガルにやって来たイギリス人と現地の女性との間に生まれたいわゆるアングロ・インディアンであり、彼の本当の故郷といえばインドなのであろう。

So, at midnight, I drove in the Plymouth to Tomalín to see my Tlaxcaltecan friend Cervantes the cockfighter at the Salón Ofelia. And thence I came to the Farolito in Parían where I sit now in a little room off the bar at four-thirty in the morning drinking *ochas* and then *mescal* and writing this on some Bella Vista notepaper I filched the other night, perhaps because the writing paper at the Consulate, which is a tomb, hurts me to look at. I think I know a good deal about physical suffering. But this is worst of all, to feel your soul dying. I wonder if it is because tonight my soul has really died that I feel at the moment something like peace.⁴⁾

(それで、真夜中、プリマスを運転して、トラスカラ人の友人、〈サロン・オフエリア〉の経営者で、闘鶏士のセルバンテスに会うためにトマリンまでやってきたのだ。そこからパリアンの〈ファロリート〉にやってきて、朝の四時半、バーから隔たった小部屋で、オチャスそれからメスカルを呑みながら、この間の夜バーヤ・ピスタのバーで呑んでいた時、くすねてきたメモ用紙にこの手紙を書いている。恐らく今は墓場となった領事館の便箋を見ると、心が痛むからだ。肉体的な苦痛についてはよく知っているつもりだ。しかしこれは最悪だ、心が死んでゆくと感じるのは。今、何か安らぎのようなものを感じるのは、今夜、僕の心が本当に死んでしまったからなのだろうか。)

トマリンおよびパリアンはクアウナワク近郊の町であるが、作者ラウリ

ーがメキシコ滞在中（1936-1938）に訪れた各地の町をモデルに造り上げた架空の町である。クアウナワク自体がメキシコ南部の観光保養都市クエルナバカ（Cuernavaca）をモデルにした架空の都市である。

トラスカラ（Tlaxcala）はメキシコ中部の州。リュウゼツランから作られるブルケ酒の生産地。古代アステカ国の領土で、スペインの支配に最後まで反抗した地方の一つである。

領事の友人、闘鶏士のセルバンテスは『ドン・キホーテ』の作者ミゲル・デ・セルバンテスを思い起こさせる。主人公ドン・キホーテは騎士であり、目の前に現れるいかなる敵にもひるむことなく、敢然と立ち向かって行く。正に闘士なのである。また領事が彼を友人と呼ぶのは前述したイギリスとメキシコの政治的対立の中で、彼がイギリスの取った自国民のメキシコからの退去という政策には同調せず、メキシコに残る決断をしたからである。

セルバンテスが経営する居酒屋〈サロン・オフエリア〉は『ハムレット』の女主人公オフィーリアを思い起こさせる。彼女はハムレットの恋人であるが、父親の復讐に思い悩むハムレットに捨てられ、気が狂い、野原にさまよい出て、小川で水死する。それは『火山の下』の物語において、最終的にイヴォンヌに振りかかることになる悲劇である。彼女のもとからアルコールを求めて逃げ出した領事を追って密林の中をさまよう彼女は突然、坂道を駆け下りてきた馬の蹄に踏みつられて絶命することになるのである。ただ、今、手紙を書いている領事には、時間的順序に従って当然のことながら、そのことに対する意識はないのである。

オチャスは蒸したオレンジの葉であるが、熱い生のアルコールを入れて飲むものらしい。メスカルはリュウゼツランの液を発酵させたメキシコ独特の蒸留酒である。

「肉体的な苦痛についてはよく知っているつもりだ」と領事は言う。彼は

領事の職に就く前はイギリス海軍の軍人だったのであり、第一次世界大戦中、ドイツ軍と勇敢に戦った経験があるからである。

〈第三節〉

前節末尾の「心の死による安らぎ」ということを受けるかたちで続けられている。

Or is it because right through hell there is a path, as Blake well knew, and though I may not take it, sometimes lately in dreams I have been able to see it? And here is one strange effect my lawyer's news has had upon me. I seem to see now, between mescals, this path, and beyond it strange vistas, like visions of a new life together we might somewhere lead.⁵⁾

(あるいは地獄には、ブレイクがよく知っていたように一筋の道があって、僕はそこを通らないにしても、最近、時々夢の中でそれを見ることが出来たからなのだろうか？ これは弁護士のお知らせが僕にもたらした奇妙な効果の一つでもある。今、メスカルをおおる合間に、その道が、その向こうの不思議な眺め、二人がどこかで一緒に送っていたかもしれない新しい生活の光景が見えるようだ。)

ブレイク (William Blake, 1757-1827) は彼のいわゆる「預言書」の一つ『天国と地獄の結婚 (The Marriage of Heaven and Hell)』の序詞の中で次のように書いている。

Once meek, and in a perilous path,
The just man kept his course along

The vale of death

（かつてはすなおな心をもって、 險難の道を、 /正しい人は死の谷に沿い / 人生の行路を歩んだ。）（『ブレイク詩集』岩波書店、2013年、寿岳文章 訳）

しかし領事は「僕はそこを通らないにしても」と言う。彼には自分が「正しい人」ではなく、過度の飲酒に溺れた罪人、地獄落ちが当然だと思っているのである。しかし弁護士からの知らせによってイヴォンヌとの離婚が決定的なものになった今、不思議なことに、二人が通るはずだった道が見えてきたというのである。そして彼はメスカルを呑んで得られる心の平安の中で、見えてくる光景を具体的に記述してゆく。

I seem to see us living in some northern country, of mountains and hills and blue water; our house is built on an inlet and one evening we are standing, happy in one another, on the balcony of this house, looking over the water. There are sawmills half hidden by trees beyond and under the hills on the other side of the inlet, what looks like an oil refinery, only softened and rendered beautiful by distance.⁶⁾

（僕は僕等がどこか北の国に住んでいるのを見ているようだ。山があり、丘があり、青い海が広がる。僕等の家は入江に建っていて、夕方、お互いに満足して、この家のバルコニーに立って海を見渡している。向こうの木立に半ば覆い隠された製材所がある。入江の反対側の丘の下に石油精製所と思われるものが建っているが、ただ離れているため、穏やかな色合いになり、美しく見える。）

「どこか北の国」というのは何か幻想的な雰囲気なたたえているが、実在の場所である。カナダ、ブリティッシュコロンビアの海辺の寒村ダラトン（Dollarton）のことである。作者ラウリーは最初の妻ジャン・ガブリエル（Jan

Gabriel) と別れた後、ロサンゼルスで知り合い、やがて二番目の妻となるマージョリー・ボナー (Margerie Bonner) とともにここに移り住んだのである。ラウリーは美しい自然環境の中で、アルコール中毒症を克服し、『火山の下』の大部分を書いたのである。

〈第四節〉

前節に引き続いて、どこか北国での二人の新しい生活の光景が具体的かつ詳細に語られる。それはスウェーデンボリ (Emanuel Swedenborg, 1688-1772) の説く天国の光景そのものである。

It is a light blue moonless summer evening, but late, perhaps ten o'clock, with Venus burning hard in daylight, so we are certainly somewhere far north, and standing on this balcony, when from beyond along the coast comes the gathering thunder of a long many-engined freight train, thunder because though we are separated by this wide strip of water from it, the train is rolling eastward and the changing wind veers for the moment from an easterly quarter, and we face east, like Swedenborg's angels, under a sky clear save where far to the north-east over distant mountains whose purple has faded, lies a mass of almost pure white clouds, suddenly, as by light in an alabaster lamp, illumined from within by gold lightning, yet you can hear no thunder, only the roar of the great train with its engines and its wide shunting echoes as it advances from the hills into the mountains:⁷⁾

(淡青色の月のない夏の宵、だが夜が更けて、十時ごろになっても金星が昼の光の中で明るく輝いているので、僕等は確かにどこか遠い北国にいて、このバルコニーに立っている。すると向こう側の海岸線に沿って、何両もの機関車で

引っ張られる貨物列車の次第に高まる轟音が聞こえてくる。僕等は幅広い入江によって列車から分け隔てられているけれども列車は東に向かって進んでおり、また変わりやすい風がちょうど今東の方角から吹いているからだ。そして、僕等は、スウェーデンボリの天使達のように東を向いている。空は晴れ渡っている。ただ、遠く、東の方、紫にかすむ山々の頭上に、ほとんど純白な雲が浮かんでいるだけだ。その雲は、突然、雪花石膏のランプの明かりによるかのように、黄金の稲妻によって内側から照らされる。しかし雷鳴は聞こえない。聞こえるのは何台もの機関車に引かれる長い列車の轟音、それが丘から山の方へと進んで行くにつれて幅広く方向を変えるこだまだけ：)

スウェーデンボリはスウェーデンの科学者、哲学者であるが、1745年、眼前に天国と地獄を見る神秘体験をしたのを境に、熱烈な神秘主義者となり、聖書の新解釈に没頭し、神秘主義的・汎神論的な新しいキリスト教を樹立して、内外の文学者、哲学者に大きな影響を与えた。彼の論文の一つ、*Heaven and Hell* (1758) において、彼は「私は天使達と交際することを、そして人間同士がするように、彼等と話をするを許されたのである」と主張し、更に天使達の属性を詳細に語っている。その一つに天使達は東の方に顔を向けているということがあり、彼はその理由を説明している。

Thus in heaven it is the east which determines all the other quarters. That quarter where the Lord appears as the Sun is called the east or orient because all life has its origin from Him as the Sun; and also because in proportion as heat and light, or love and intelligence, are received from Him by the angels, the Lord is said to arise upon them. Hence also it is that the Lord in the Word is called the East. (A Companion to *Under the Volcano*: University of British Columbia Press,

Vancouver, 1984: p. 65)

(かくして天国においては他のすべての方角を決めるのは東なのである。神が太陽として現れる方角は東あるいは東方と呼ばれるのである。すべての生命は太陽としての神に起源をもつからである。同様に熱と光、あるいは愛と英知に
応じて、天使達によって神に受け入れられるので、神が彼等に現れると言われ
るのである。この故に、同様に聖書における神は東と呼ばれるのである。)

領事が思い浮かべるのは対岸を走る貨物列車だけではない。丈の高い索
具を備えた釣り船が岬を回って湾内に入ってくる。一時、海岸全体に波音
が響き渡り、水面は一面に泡立ち銀色に輝き渡るが、やがて湾内には静寂
が戻ってくる。そして再び、

... within the white white distant alabaster thunderclouds beyond the
mountains, the thunderless gold lighting in the blue evening,
unearthly...

(……遠く山々の彼方に浮かぶ真っ白な雪花石膏のような雷雲の中で金色の稲
妻が走り、青い夕暮れの中で光る、この世のものとは思えない……)

つまり、領事が思い浮かべる、どこか遠い北国にある、山々と丘に囲ま
れ、前面に青い海が広がる場所とはスウェーデンボリの天国そのものなの
である。領事は彼の信奉者なのである。

〈第五節〉

前節海辺の光景を引き継ぐものだが、たった一文だけの節である。

And as we stand looking all at once comes the wash of another unseen

ship, like a great wheel, the vast spokes of the wheel whirling across the bay.⁸⁾

（そして僕等が立って眺めていると、突然目に見えない別の船からのうねりがやってきて、大きな舵輪のように、巨大な渦巻きの輻が湾全体に広がる。）

領事は「目に見えない別の船」に天国の平和をかき乱す何か悪しきものの存在を感じ取り、それから目をそむけようとしているのだろうか。あるいは、アルコールが切れて、地獄の幻視が頭をもたげてきたのだろうか。いずれにしても彼は海辺の光景の記述はここでやめて、心の平和を保つためなのか、何杯かのメスカルを呑んだのち、〈第六節〉を書き始めるが、これについては稿を改めて取り扱いたい。

註

- 1) Lowry, M. *Under the Volcano*, Penguin Modern Classics, 1963, p. 81.
- 2) *Ibid.*, p. 81.
- 3) *Ibid.*, pp. 81-82.
- 4) *Ibid.*, p. 82.
- 5) *Ibid.*, p. 82.
- 6) *Ibid.*, p. 82.
- 7) *Ibid.*, pp. 82-83.
- 8) *Ibid.*, p. 83.

参考文献

- マルカム・ラウリー『火山の下』（斎藤兆史監訳）、白水社、2010年
Chris Ackerley and Lawrence J. Clipper: *A Companion to Under the Volcano*,
University of British Columbia Press, 1984

